HP 掲載用

研修報告書　№14

所　属：　昭和医科大学病院
研修先：　土佐市民病院

2025 年 8 月 1 日から 8 月 31 日までの 1 か月間、土佐市立土佐市民病院で地域医療研修を行いましたので報告します。

研修内容は大きく分けて外来業務・病棟業務・当直および救急対応の 3 つでした。外来業務では内科・外科・耳鼻咽喉科・小児科を経験しました。特に内科外来では、医療面接、検査オーダー、入院適応の判断、処方箋作成まで一連の流れを研修医主体で行いました。所属先の大学病院では研修医が外来を持つ機会がほとんどなく、初めは診療の進め方に戸惑う場面もありましたが、上級医の先生方の丁寧な指導により徐々に慣れ、自ら判断する力を培うことができました。その結果、帰宅可能な場合と入院が必要な場合との境界を以前より見極められるようになったと実感しています。

外科外来では一般創傷の処置から消化器・甲状腺腫瘍のフォローまで幅広く経験しました。大学病院では各分野が細かく専門分化されていますが、土佐市民病院では地域の中核病院としてオールラウンドに対応しており、地域医療を担う病院の役割を強く感じました。

病棟業務では、検査フォロー、輸液管理、薬剤調整、さらに家族へのインフォームド・コンセント（IC）まで、主治医としての役割を上級医の指導のもとで担いました。初めての主治医制度は大きな責任を伴いましたが、その分主体性を持って治療方針を立てる重要性を学ぶことができました。特に家族への説明は所属先では経験が少なく、病状を平易な言葉で伝える難しさを痛感しました。同時に、信頼関係を築くうえで丁寧な説明が不可欠であることを理解しました。また、入院中に患者さんが接する時間は医師よりも看護師やリハビリスタッフの方が長いことが多く、多職種からの情報が診療の質を高めることを実感しました。医療はチームで成り立つものであることを改めて認識した 1 か月でした。

当直や救急対応では、大学病院との違いを最も強く体感しました。大学病院では「最後の砦」として夜間でも幅広く検査を行うことが標準ですが、土佐市民病院では限られた人員と資源の中で、翌日の外来へつなぐために必要最小限の対応を行うことが求められました。都市部と地方での医療資源の差は大きな課題ですが、近隣病院とのネットワークを活用するなどの工夫によって、その差を少なくし、住む地域にかかわらず平等な医療を提供する仕組みの重要性を考えさせられました。

休日には高知県の豊かな自然や食文化、伝統文化にも触れることができました。仁淀川や四万十川、四国カルストといった雄大な自然は東京では体験できないものであり、心から感動しました。食事面では本場の鰹のたたきや、ちょうど旬であったメジカの新子を味わうことができ、土地ならではの食の魅力を堪能しました。また、よさこい祭りを初めて生で観る

機会に恵まれ、その迫力と熱気に圧倒されました。こうした経験は研修生活に彩りを与えてくれただけでなく、地域に根差した文化と人々の温かさを肌で感じるきっかけにもなりました。

今回の地域医療研修を通じて、診療技術のみならず、医師としての責任感や多職種連携の大切さ、さらには医療制度の課題についても深く学ぶことができました。高知で出会った自然や文化、人々の温かさも含め、かけがえのない経験となりました。今後はこの学びを自らの診療に生かし、より良い医療を提供できる医師を目指して研鑽を積んでまいります。最後になりますが、本研修でご指導くださった先生方、共に働いたスタッフの皆様に心より感謝申し上げます。